エレーナの秘密都市

ISTC Moscow
高野　誠
e-mail: takano@glas.apc.org
home page: http://www.glasnet.ru/mosinfo

深い森の中の一本道を行くと、国境の検問所のようなゲートと機関銃を背負った若いロシア人兵士達が、我々の車を迎えてくれた。モスクワから地方への出張が今回初めてのオランダ人の同僚が、カメラを手に車の外へ出ようとしたが、同乗していたロシア人研究者が制止した。ここの写真撮影は禁止。写真撮影が見つかれば、カメラからフィルムを抜き取られ、さらにパトローネからフィルムを紙テープのように全部引っぱり出されて、近くのごみ箱にポイと放り投げられることは確実だ。車の傍には、車の底などに隠れているスパイを探し出す軍用犬が、この時は、暇そうに寝そべっていた。ここは、旧ソ連でも最大級の秘密閉鎖都市、原水爆研究開発の中心地、チェリアビンスク-70 である。メガトン級、キロトン級の種々の原爆や水爆が開発されてきた。軍民転換として、メガネレンズなどを作っているが、1万人近くいる旧核兵器研究者を支えるには程遠い。

チェリアビンスク-70 の様に、都市名に数字のついた秘密閉鎖都市は旧ソ連内に１０ヵ所程あるが、それではこの 70 という数字は何だろう。70 番目という意味ではないとすれば何を意味するのか。この近くに、チェリアビンスク-65 という別の秘密閉鎖都市もある。別名、MAYAK（マヤク）、何か生物化学兵器でも作っていそうだが、ここは原爆の火薬に相当するプルトニウムを使用済核燃料から抽出する核燃料再処理施設である。数字のつく秘密閉鎖都市はこの他に、アルザマス-16、トムスク-7、セミパラチンスク-21、ペンザ-19、スベルドロフスク-44、ズラタウスト-36、クラスノヤルスク-21、クラスノヤルスク-40 などがあり、原水爆の研究開発製造に関連している。総てが秘密裏に動いていた時代の産物であるため、だれも明快にこの数字の意味を説明できはしなかったが、おおよそ、この数字はその秘密閉鎖都市の距離を示しているのだろうと言うことで、エカテリンブルグ空港からチェリアビンスク-70 への赤松林が続く国道３６号線を走るマイクロバスの中で、皆の意見が一致した。例えば、チェリアビンスク-70 は、チェリアビンスク市から 70Km の位置にあるという具合だ。この名前も、敵を撹乱するためか時々変わっていたようだ。チェリアビンスク-70 は、以前はもっと近くの小さな町の名を取ってカスリ-24 とよばれていたし、アルザマス-16 はモスクワ-300 と呼ばれてい

た時がある。しかし、カザフスタンにある核実験場セミパラチンスク-21 は、起点となるセミパラチンスク市から 21Km ではきかない、200Km 程度離れている。いずれにしろ、誰が、どんな理由でこんな名前を付けたのかは、ロシア人核兵器研究者たちも明確な解答を持ち合わせていなかった。余談だが、チェリアビンスク-70 は、イメージを一新するためか現在はスネジンスク（雪の町）というロマンチックな名前にまた変わっていた。

地平線の彼方まで、延々とまっすぐな道路が続く国道 36 号線に距離表示があった。アルマータ 2500Km。この道はアルマータからさらに、キルギスタンのビシュケイクへと続く。ビシュケイクからは中国の天山山脈にはばまれて、ヨーロッパから続いてきたこの道も行き止まりである。以前、厳冬期の１月にビシュケイクを訪れた際、ドイツから来た大型のトレーラートラックのコンボイを見かけた。ドイツから陸路いったい何日かけて走破するのか。途中、悪路、零下 40 度の寒気、警察の査察と賄賂強要、食料および燃料の調達、海賊ならぬ陸賊の出没、多くの困難に遭遇するであろうことが容易に想像される。このトレーラーはまさに、現代の隊商だ。こんな思いを巡らせているうちに、車は、ゲートを通過してチェリアビンスク-70 に入って行った。ここは、つい数年前までは外国人は一人として入れない所であった。ロシア人とて、特別許可を取るのは大変むずかしかった。こんな秘密閉鎖都市にどうして４万人もの人が住むようになったのだろう。核兵器の開発研究をすることが分かっていながら、研究者はどうしてここに集まって来たのだろう。また、ここの住人に自由はあるのだろうか、町の外に出られるのだろうか。さらに森の奥へと、雪けむりをあげながら走る車の中で、今度はこんな疑問が湧いてきた。

我々の宿泊したホテルは、町の居住区の中心部にある。この町は、居住区と工場地区に分かれている。工場地区には、各種の研究施設が点在している。全部でいくつ施設があるのかという質問に対しての回答は、結局、誰からも得られなかった。この質問をすると、直ぐに別の話題に切り替えられて、はぐらかされる。機密保持のために、皆、特別な教育を受けていることは明らかだ。ホテルにチェツクインの際、警備隊員から１枚の紙を渡された。それには、地図付で我々の行動範囲がホテルから約 500 メートル位の範囲に限定されていること、ホテルから外出の際には必ず警備隊員を伴うこと、このルールに例外無く従うこと、このような訪問者心得がいくつも、この紙の両面を使って事細かに書かれていた。警備隊員が必ず同伴と言うのは、うっとうしいが、機密漏洩防止という目的のほかに、訪問者の警護という目的もあるようだ。こんな秘密閉鎖都市では部外者、特に外国人はすぐに分かってしまう。別の秘密閉鎖都市では、現金目当てに外国人が既に２人殺害されている。ここでも、西側のジャーナリストが一人、この秘密閉鎖都市に入ったきり、出てこなかったそうである。特に夜は外出を控えるように指示された。

ホテルは、ロシアの地方都市によくあるタイプのものだ。特に、バスタブが短い代りに深めになっており、日本の風呂に近い感じがする。また、ベッドの両端が衝立のようになっており、身長180cmの私は、丁度サンドイッチ状になってしまい、ベッド上で背伸びをすると、この衝立に頭突きをするはめになる。また、これは盗聴器ではないかと疑う人もいるが、あの画一的デザインの有線ラジオもやはりあったが、電話はない。もっとも、壁が薄く隣の部屋の話声は筒抜けであり、盗聴器など必要ないというのが実感だ。この、ホテルの近くの広場の中央にはレーニンの銅像が、ソ連時代を懐かしむかのように立っている。その周囲に、文化会館、2階建のデパート、食料品店、電話局が配置されている。人工的に開発された旧ソ連の小都市に良く見られるパターンである。これらの、周囲を普通のフルシチョフタイプ（リフト無し5階建、2 DK）の質素なアパート群が取り囲んでいる。まだ、外も明るかったので仕事の終わった女性通訳と警備隊には内緒で近くを散歩した。この若い通訳は、バイカル湖からそう遠くないチタ市から来たそうである。金髪に近い明るい栗色の長い髪に、きれいな青い目をした、しかし、どこかアジア的容貌も感じさせる、色白で小柄な美人である。おそらく、ロシア人とシベリアのアジア系少数民族とのハーフであろう、エレーナという。今まで、外国人と会うこともなく英語とフランス語の翻訳を専門にやっていたそうだ。もちろん、私のような訪問者の行動可能範囲も今では十分知っていて、例の紙に示された地図の行動可能領域を逸脱することはなかった。この領域内には、特に注目すべきものはなく、どこかで見たロシアの町と言った所だ。彼女に、研究者はどうしてこんな所へ来るのか聞いてみた。

優秀な研究者をこの町に引っぱって来る方法は、良い待遇を与えると言う、しごく当りまえの方法であった。給与だけでなく、住宅環境、医療水準、教育施設、日用品や食料品等の物資などで、普通の町より格段の好条件を提供するという優遇措置によって良い人材を集めていた。モスクワの大学から来た研究者が多く、中には別の秘密閉鎖都市から転勤して来た者もいる。それにしても、核兵器の研究にナゼという気もするが、常に核戦争を意識させられてきた国民であれば、核兵器を開発するという道義的うしろめたさもそんなに感じなかったのかも知れない。今でも、ロシアの大学や会社には、ヨウ素剤の服用、飲料水の確保、外気の遮断方法等、核戦争勃発時の緊急対応策が図解で示された大きなポスターがいたるところに貼られている。モスクワの地下鉄がかなり深い所を走っており、核戦争を意識したものであることは周知のとうりである。核戦争に対してロシア人は日本人より、現実に起こりうる事としてずっと強い危機感を持たされていたようだ。核兵器を第一線で実際に開発してた研究者と会った。彼は、核兵器の開発は、結局は物理学の研究であり、研究者として面白いと言っていた。つまり、超高温、超高圧下での特殊な物理現象は核爆弾でのみ実験できるもので、物理学の研究に重要であると。彼は、小型爆弾を研究しており、自分のアイデアで開発した核爆弾を持って、

何回もセミパラチンスクの核実験場に通ったそうだ。ここでは、核爆弾(Nuclear Bomb)とは呼ばずに、核爆薬（Nuclear Charge)と呼んでいる。やはり、爆弾という言葉には抵抗があるのだろうか。ちなみに、メガトン級の大型爆薬は、北のバレンツ海にあるノバヤゼムリヤ島で試験されたそうだ。バクダン仲間と、ロシア人のすきなバーニャ（サウナ）へ一緒に行った。彼等の話題は、今は昔となったバクダン試験の話し。政府からの研究費を湯水のように使った、彼等の黄金時代、以前に聞いた太平洋戦争時代のオヤジの武勇伝と、なにかオーバーラップする。

どこかアジア的な雰囲気のする先程の美人通訳、エレーナが近くの湖に案内してくれた。５人の小学生が体育でスキーの授業であろう、５組の平行線をきれいに、一面真っ白になった湖の上に描いて行った。冬の間は凍った湖の真ん中に境界を示すフェンスが張られるのだと、エレーナは自嘲気味に説明してくれた。外部の者が侵入しないようにというのが理由だった。では、こちら側の人は自由にゲートの外へ出られるのだろうか。この秘密閉鎖都市に住む住民が、ゲートの外へ出る際には、「あなたは再びこの町に入れる特権を有する」と言う証明書が発行されるそうである。ソ連の崩壊で核兵器は無用となり、予算が大幅にカットされた今、この町で生活することがまだ特権となっているかどうか疑問だが、町の外には出られるようである。ただし外といっても、ロシア国内だけで外国用のパスポートは一括管理されていて、個人が気ままに自由に外国に行ける訳ではない。これは、核兵器研究者の国外流出問題とも関係があり、そう簡単にこの状況は変わらないだろう。さて、ロシア内であれば町から出られるが、一方、外部の者はこの町に容易に入れないのは確かで、そのためこの町の治安状態は大変良いと自慢する。なるほど、アパートの１階でも窓に防犯用の鉄格子をはめている所は見かけない。モスクワでは、１階は常識、２階さらに３階でも鉄格子をはめている窓がある。この町をオープンにしたら良いのではと言う意見に対し、住民は否定的である。治安の悪化だけでなく、この町の豊富な物資を目当てに買い出し客がどっと押し寄せ、物が無くなるという不安がもう一つの理由であった。しかし、このまま鎖国状態を続ければ、激動するロシア経済から取り残されてしまう。外からの資本は入らず、政府の予算だけに頼っていたのでは、展望がまったく開けない。現在でも、政府からの資金は、給与の支払だけで無くなってしまう。新たな、軍民転換用の施設を作る資金も無い。政府予算がさらにカットされたらどうするつもりだろうか。

ここの、給与は平均的なところで約 200～400 ドル。政府から与えられたアパートを売ろうにも、閉鎖都市ではたいした値は付かない。この町から出て、別の町で働こうにも住宅を確保できなければ、ここから動けない。モスクワ市内にある、アパートが群立しスラム街のようになった所では、そうとうひどい点に目をつぶればなんとか月 300 ドル位でもアパートを借りられるが、まずは良い職が見つかるかどうかである。彼等にと

って、自分のアパートを売るにはだいぶ勇気がいる。今となっては、彼等の最大の財産は政府からもらったアパートである。ここの研究者は、将来性のあまり見込めないこの町に見切りをつけるか、今年６月の大統領選挙でなにか奇蹟が起こるのを待つか、このどちらかの選択しか今の所ない。

この閉鎖都市にマフィアの幹部が住んでいるといるうわさをエレーナから聞かされた。核物質の闇取り引きかと思ったが、そうではなく、このマフィア幹部は身の安全を確保するため、市に賄賂を出して、この町に住んでいるそうだ。確かに、閉鎖都市は絶好の隠れ家、それよりも他のマフィアに邪魔されない安全な稼ぎ場であろう。しかし、いつ秘密がバレテ、刺客が賄賂を払ってこの町へ入ってこないとも限らない。モスクワ市内では、しょっちゅうマフィアの抗争、縄張り争いと思われる殺人事件がある。先日は、アメリカ大使館の近くでボルボに乗った会社経営者がプロの刺客に機関銃弾をフロントグラスに乱射され死亡した。この時、運転手はうまく逃げたようだ、と言うよりマフィアに抱き込まれて、手引きしたと言った方がよいだろう。最近、モスクワ近郊の IBM パソコン工場が閉鎖に追い込まれた。その理由が、ロシアでは合法的な経営では利潤が出ないと言うものであった。課税対象が、利益ではなく総売上の 50%では、いたしかたあるまい。まともにやっている会社が潰れて行き、マフィアと手をつないだ会社が生き延びる。殆どの会社が何らかの形でマフィアと関連がある。殺された、この経営者もマフィアとうまく行かなかったのだろう。マフィアの巣として知られている、日本企業のオフィスも多い、国際貿易センタービル。マフィアと手を切ろうとして、このビルからオフィスを移した会社のモスクワ支店長も殺された。やみが支配する国になりつつあるのだろうか。

チェリアビンスク-70 を去る日が来た。閉鎖都市のゲートを出てから車で２０分くらい行くと、森林が終り平原が開ける。黒くくすんだ古い木造のロシア式の家屋が２０戸くらい、平原のなかに身を寄せ会うよにかたまった村がある。ソ連の崩壊とともに、ここでもレーニンの時代に強制的に破壊された村の小さな教会の再建が始まっていた。しかし、チェリアビンスク-70 は、人工の町、もともと教会などない。教会もない閉鎖都市で、彼等はここで朽ち果ててゆくのをただ待つだけなのだろうか。町を出るとき、エレーナが見送りに来てくれた。そして、私をみつめて尋ねた「あなたは独身ですか」と。そのうるんだ青い瞳は、「わたしをここから連れ出して」と言わんばかりであった。これは、私一人への問いかけではない、日本、アメリカ、いや全世界に向けて、今、善良な多くのロシア人が発しているメッセージでもある。

*** 筆者は原研、燃料サイクル安全工学部からモスクワの国際科学技術センター(ISTC)へ出向中、モスクワへ来られる際にはご遠慮なくご連絡下さい。